



TITLE:

經濟學の悲哀

AUTHOR(S):

中谷, 實

CITATION:

中谷, 實. 經濟學の悲哀. 經濟論叢 1938, 47(5): 724-731

ISSUE DATE:

1938-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131167>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第五號

昭和十三年十一月一日發行

論叢

勢力説に於ける存在拘束性……………文學博士 高田保馬

經濟學の發展と新日本經濟學の性格……………經濟學博士 石川興二

時論

綜合リンク制について……………經濟學博士 谷口吉彦

支那法幣の發行準備及價值維持政策……………十龜盛次

研究

朝鮮の水産業……………經濟學博士 蜷川虎三

滿洲建國精神と協和會の使命……………經濟學士 中川與之助

說苑

經濟學の悲哀……………經濟學士 中谷實

封鎖貨幣制度下の國際的再保險……………經濟學士 佐波宣平

複式簿記法の傳播……………經濟學士 岡本愛次

大量觀察と大數觀察……………經濟學士 有田正三

附錄

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

說苑

經濟學の悲哀

中谷實

一序

アダムスミスを其の父とする英國經濟學は、其の歴史的發展過程に於て多少の消長を免がれなかつたが、其の間に於て分析は愈々精密となり依然經濟學の主流を占むるのみならず、近來「古典派復興」の旗印の下に其の再認識が澎湃として學界を風靡する事となつた。

然るに他方、茲數年來の世界に於ける經濟情勢の動搖が古典派經濟學に對して幾多の批判を喚起し、從前の經濟理論を以てしては今日の經濟を把握し得ないとの聲が高まり來つた事も亦否定し得ないのである。斯かる折柄、古典學派發祥の地たる英國に於て出版されたるウットン夫人の著「經濟學の悲哀」(B. Wootton) ;

Lament for Economics) は、古典派經濟理論の基礎をなす均衡理論に痛烈なる批判を加へ、經濟學無用論を高唱したるが爲めに、同國評論界に多大のセンセーションを喚起し、極右極左の兩方面より「經濟學への有効にして最終的な摘發なり」と言はれ、又「經濟學者の危機」が呼ばれるに至つた。

勿論學徒として學問上無價値なる批判に一々耳を傾ける必要はないが、さりとて此れを全然無視する事も亦學徒の執る可き態度では無く、此れを検討する事によつて裨益する所大なるものが存するであらう。故に以下ウットン夫人の主張を出來得る限り簡単に紹介し此れが批判を加へる事とする。

二 ウットン夫人の批判項目

經濟問題が總ゆる他の諸問題に比して重要視せられる事今日程甚だしき時代のなかつた事は今更言ふ迄もない所であるが、斯かる時代に於て經濟學特に古典派經濟學研究の現状が甚しく危殆に瀕し且逆説的な所

以を強調する爲めに、ウットン夫人は告發の形式を執つて、先づ次の五項目を擧げてゐるのである。²⁾ 即ち(一)現今一般に研究せられてゐるが如き經濟學は社會にとつて無用なる事、(二)其の研究が素人にとりて甚だ理解し難き事、(三)經濟學に於ては學者間に其の所説の一致を求め得ざる事、(四)經濟學の内容が現實の實情より餘りにも懸け離れてゐる事、(五)經濟學者は自づと資本主義(現狀)擁護論に陥り易き事、等が其の主要項目である。以下此れを簡單に説明しやう。

先づ最初の項目に就いては、夫人は、苟しくも經濟學の研究が尊重せられんが爲めにはそれが社會の進歩發展の爲めに貢獻す可きものでなければならぬ事を高調し、經濟學者にして、其の研究が社會の進展に寄與せざる事を意に介せざるが如きものを排撃するのである。³⁾ 勿論夫人とても經濟學の研究が直接に現實に役立つ可き事を要求するのではないが、ピグーの所謂「道具製作人」と「道具使用人」との間に聯關の保たる可き事を要求し、自己の製作したる鋏が何人かによつて耕

作に用ひられん事を期待する。即ち純粹理論經濟學者と雖も其の製作したる道具が使用せられる事に對して責を負ふ可きものと考へるのである。⁴⁾

次に第二の項目に就いて見るに、キャナンの言を援用して、⁵⁾ 現今の經濟學研究が餘りにも複雑にして専門化し世人に理解せしめ得ざる點を難するのである。即ち現實の經濟問題解決の爲めに學者に意見を求めても、其の解答が素人に解せられず從つて利用せられ難き點を高唱する。然らば素人に理解され難き事が經濟學にとつて何故に許され得ないのか。夫人は其の理由として、經濟學が他の諸科學に比して其の歴史未だに淺く見る可き効果を擧げ居らざる事を主張するのである。⁶⁾

更に第三の項目に關しては、夫人は「六人の經濟學者が集れば七つの説が唱へられ其の中二つは何某氏の説である」と云ふのが現狀であると述べてゐる。而して經濟學の發展の爲めには異説の存在も此れを認めない譯では無いが、唯其の中心に於て意見の一致がなければ科學ではないと斷言してゐるのである。⁷⁾

2) B. Wootton; Lament for Economics, ch. I.

3) ibid. pp. 16-7.

4) ibid. p. 18.

5) Cannan; "The Need for Simpler Economics", Economic Journal Vol. XLIII, No. 171.

6) Wootton; ibid. p. 20.

尙ウットン夫人は、前述の第四第五の論點を詳細に論述してゐるのであるが、此等は最も重要な問題なるが故に項を改めて更に詳細に説明する必要がある。

先づ右の三項目の關係についてののみ簡單なる考察を加へよう。即ち此等三項目の主張について見るに、第二の非難が第一の非難の基礎になれる事は已に前述の所であり、又第三の非難は次に述ぶ可き第四の項目にその原因を求め得るであらう。而も此等の非難は左程重要なるものではなく、唯經濟學が科學たるが爲めには現實に有用なるを要するや否やが問題として残るのであるから、次に此れが解答を試みる事とする。

三 經濟學の現實よりの乖離

ウットン夫人が現今の經濟學者に對して誹謗を加へる爲めに採りたる最大の武器は、其の告發の第四項に掲げたる所の「現時の經濟學が現實より遠ざかる事が餘りにも甚だしい」と言ふ點であり、此の事の爲めに經濟學が現實を説明し得ず又無用のものであると言ふ

のである。然らば如何なる理由によりて此れを主張するか。先づ其の所説を述べて此れが缺點を指摘する事としたい。

夫人は先づ、經濟學が如何なるものであるかを規定するに當つて、此れを「人類の普通の生活業務——特に其の幸福に必要なものを調達し使用する事に關する個人又は社會の活動を研究す可きもの⁹⁾」とするマーシャルの定義を考慮しつつも、實は専ら Robbins に從つて、經濟學の研究範圍をば「不十分なる資源を選択的(最も經濟的)に處分す可き人間活動の形態¹⁰⁾」に局限せんとするのである。即ち、各人は經濟原則の命ずるまゝに活動する事を前提する所の——(換言すれば市場理論の上に立つ所の)價值理論——特に均衡理論的分析をば經濟學そのものとなし、此れに批判のメスを加へてゐるのである。而して夫人によれば、現實の市場現象は、經濟現象が特異なユニークな性質を有するが爲めに限りなく複雑錯綜し¹¹⁾、且つ偶然の事情や各市場間の影響に支配せられて變轉極りなきものであるに拘は

7) ibid. p. 14.

8) ibid. p. 25.

9) A. Marshall; Principles of Economics, 6th ed. p. I. Wootton; ibid. p. 44.

10) Robbins; Nature and Significance of Economic Science, p. 15. Wootton; ibid. p. 46.

らず、經濟學は其の研究を市場内の現象に局限し、諸々の影響を「他の事情にして變りなければ」と云ふ前提に押し込めて、強ひて其の一般的立論をなすが故に、¹³⁾茲に經濟學が現實の實情より乖離す可き原因を求め得ると言ふのである。斯くて經濟學の有用性を否定する論據も亦右の事情より演繹せられてゐるのであつて、次の如き理由が擧げられてゐる。即ち經濟學に於ては、他の技術の方面等と異つて、特殊事情の特殊研究は複雑錯綜せる一般的實情より遠ざかる事甚だしき爲めに、道具製造人と道具使用人との間の間隙を充し得ず、¹⁴⁾或は獨占が發達したり又は權力的統制の強化によつて市場理論の適用範圍が著しく狹められてゐるのが事實であり、¹⁵⁾更に現實の經濟問題の解決には量的なる豫測を要求せられてゐるに拘はらず經濟學が單に其の方向のみを答へて量的解答を與へ得ないと言ふのである。殊に夫人は、均衡理論に對する新らしき批判として先づケインズの雇傭の理論を¹⁷⁾擧げ、此れが從來の市場理論と異つて「より多く消費する事により、より多く

の財を獲得せしめ得る」と論ずる所より、此れを以てロビンス流の「不充分なる資源の選擇的處分」と云ふ原則への克服となし、¹⁸⁾更にハイエクを拉し來つて、彼が一つの均衡より次の均衡への移行過程を説明するに際して取りたる完全雇傭の原則(即ち不充分資源の原則)を現實に即せざるものと痛論し、而も此等の兩理論さへも均衡理論の適用範圍を決め得ないと云ふ理由によつて此れを排斥してゐるのである。¹⁹⁾尙又夫人は、此れと關聯して經濟學の科學性をも論究してゐるのであるが、此れとても、經濟學が經驗的觀察的なものでなく従つて此れに歸納的具體的な定義がなく、化學や動物學と其の科學性を異にすると言ふのみである。²⁰⁾然らば此れに對して如何なる批判が加へらる可きであるか。先づウットン夫人の經濟學に對する解釋より吟味するに、彼女は前述の如くにロビンスの定義を執つてゐるのであるが、此れに對して其の批判者の一人たるフレーザーは次の如き解釋を下してゐる。²¹⁾即ちロビンスが經濟學を右の如くに解したのには二つの意圖

11) ibid. pp. 62, 69, 76, 108.
 12) ibid. pp. 66, 108.
 13) ibid. pp. 45, 53, 55, 71, 108-9.
 14) ibid. p. 64.
 15) ibid. pp. 56, 84-7, 109.
 16) ibid. pp. 78, 109.

が存してゐたのであつて、其の一つは、自己が經濟學の中心問題と考ふるものを高調して然らざる問題との限界を明確ならしめ以て經濟學の組成を發展し明確ならしめんとした事であり、其の二は、斯かる經濟學（價值理論—不充分資源の選擇的處分）の分析により、假令枝葉の具體的經濟問題については學者間に異論が存しても此の中心的結論に於ては一致す可き事を示さんとせし所である。従つて、ロビンスの定義より價值理論の均衡論的分析のみが經濟學の全部なりと考ふる事は誤りであり、他の批判者ハロッドの如きも、經濟學の範圍内に、價值及び分配理論、動態的經濟學並びに實證的研究を包含せしめて、その然らざる所以を強調してゐるのである。²²⁾又均衡理論が所謂 *Ceteris paribus* 條項に一切の特殊事情を押し込めて唯直接的なる原因のみに着目し、従つて現實の市場現象より遠ざかる懼ある事は正にウットン夫人の言の如くである。然し乍ら此の事は經濟學者自らが充分自覺せる所であつて、ハロッドも、假令最近における經濟學が此の諸前提の推

理に重點を置く様になつても尙舊來の需要の法則に關する理論が其の價值を失はざる所以を強調し、フレージャーの如きも、斯かる缺點は社會生活自體に本來的なる複雑性の存する結果であり、經濟學が此れを創出したるものでもなく又其の度を強めたるものでもないと言つてゐる。²¹⁾而も、ウットン夫人が専ら此の理由より經濟學の無用性を主張せる點は大いに反省を要求す可きであつて、彼女は半片のパンを得るよりも全然パンを得ざる場合を選ぶものと言はれねばならぬのである。今フレージャーの擧げる例を引用して、²³⁾外國爲替の統制によつて一國貨幣の對外價值が維持せられ而も其の國內價值が低下せる場合に、自由貿易を恢復したならば其の結果は如何になるかを考察する。此の際經濟學を知らざる者は、或は破壊的なる爲替相場の下落を考へ、國際貿易關係の破綻に次いで國內物價の暴騰——攪亂——飢餓と云ふが如き無謀なる答辯をなすかも知れない。然るに經濟學者は、一方に爲替相場下落の反作用を考へ、貨幣當局が無謀なる措置に出でざる限り

17) Keynes; General Theory of Employment, Interest and Money, 1936.

18) Wootton; *ibid.* pp. 96-98.

19) *ibid.* pp. 101-107, 109, 110.

20) *ibid.* ch. 3.

21) L. M. Fraser; "Economist and their critics", *Economic Journal*, Vol. XLVIII, No. 190, p. 120.

は對內的貨幣價值が零に迄は下り得ない事を教ふるであらう。即ち經濟學者は假令自由貿易恢復の措置を直接に決定す可き資格を持たないとしても、少く共賢明なる截斷をなす可き素材を提供するのである。故に右の理由を以て直ちに經濟學の無用を論ずるは當らないのであり、經濟學が科學としてその有用性を必要としても尙此れによりて經濟學の科學性を否定し得ないのである。唯ウットン夫人の云ふが如く、經濟學は餘りにも理論的なる道具の製作に専念した爲めに、より卑近な實用的なる道具の製造に努力を費し得なかつたと言ふ事だけは考へ得られるかも知れないが、又經濟學は他の自然科學と同じ意味に於ては科學ではないかも知れないが、さりとて價值理論均衡理論を以て科學に非ずとなし従つて研究の價值なきものと論理を飛躍せしめる事は此れを許し得ないのである。

四 經濟學者の資本主義擁護

最後にウットン夫人は、經濟學研究を排撃する手段

經濟學の悲哀

として、經濟學者は嚴正中立的立場を標榜し乍ら不知不識の間に現存の社會組織即ち資本主義の經濟組織を擁護するに至る點を指摘し、更に今後の經濟學の進む可き動向をも指示してゐるのである。然し乍ら此處では此れが詳細なる紹介を避け、其の主張の根據を指摘すると共に此れが批判を加へるに止めたい。

先づ夫人は、所謂限界收益均等の法則が規範的内容を持つ事を指摘して、價值理論均衡理論に捉へられた頭は必然に現存經濟組織を擁護するに至る所以を述べてゐるのであるが、其の際、經濟學者が均衡状態を以てオプチマルなる状態と見る點を五つの例外的設例によつて批判してゐる。然し乍ら一般的原理に對する個々の例外的事例は社會科學にとりて不可避の事なれば、此處では此等の個々については批評を差控え、此れに對してフレイザーのなしてゐる主張を擧げる事とする。即ち(一)價值論の分析には規範的な側と實證的な側とが存するが、少く共他の事情にして等しければ均衡状態は不均衡の状態より望ましいと云ふ限りに

22) R. F. Harrod; Scope and method of Economics; Economic Journal, Vol. X LVIII, No. 191. P. 383.

23) ibipp. 388-9

24) Fraser ibid. p. 198.

25) ibid.

26) Wootton; ibid. pp. 67, 268.

於て、それは規範的性質を有してゐる。(二)とは言へ此の規範的性質は一の假定の上に立つものであつて、それは現存の趣味・機會・制度・及び分配關係の構成的條件の下に於てのみオプチマルである。然し此の構成的條件自體は必ずしもオプチマルとは考へられないのである。(三)又右の如き一定の條件の下に於けるオプチマリテートであつても、それが制限的なるが爲めに實際上の意義を失ふものではなく、此の制限的條件の不變なる限り、競争による均衡狀態は獨占や不均衡の狀態よりも望ましい。(四)かくて均衡論的分析は夫れ自體が經濟における理想を示すものではないが、一定の資源の使用法を批判す可き標準を與へる事は明らかである。

尙ウットン夫人は、經濟學者に對して今後經濟問題以外の諸種の領域に渡つて研究を進む可き事を要望してゐるが、斯かる事は個人としての經濟學者に此れを強要す可きものではなく、ハロッドも極力此れを痛論して暗愚にして嘲笑す可き觀念と言つてゐる。³¹⁾又夫人

は、社會主義の下に於ては價值問題が直ちに解決する事を理由として均衡理論を捨つ可き旨を暗示してゐるのであるが、此れ又經濟學より其の仕事を奪ふものであつて、經濟學無用の前提より導き出されたる曲論に過ぎない。³²⁾

最後にウットン夫人は、經濟學を以て社會改良の爲めの研究と見る立場より、從來の經濟學より編み出されたる政策目標が單に一人の政策目標であり一派の政策目標であるとなし、寧ろ社會主義又は統制主義の政策に此の困難の存せざる事を高唱してゐるが、更に彼女が最善の方策として、富裕階級に對して所得の平等なる分配の最もオプチマルである所以を信ぜしむ可しと言ふに至つては、彼女こそ正に現實より遠ざかる事甚だしきものと言はねばならぬのである。³³⁾

五 結 び

以上に於てウットン夫人の經濟學研究無用論を紹介し且つその検討を加へて來たのであるが、此れを一言

27) ibid. pp. 132-136.

28) ibid. pp. 136-138.

29) ibid. pp. 168-175.

30) Fraser; ibid. p. 203.

31) Harrod; ibid. pp. 410-1

32) Wootton; ibid. pp. 268, 272, 276, 295, 299.

にして言へば、彼女は、現時の經濟學研究——特に市場理論を前提とする均衡理論的分析は、無數の條件の上に立つものなるが故に現實の實情と一致せず従つて現實の經濟問題を解明し得ず、爲めに經濟學の研究は無用なりと言ふに盡きる。勿論其の所說の中には正に肯綮に中る所もあり好意ある忠言として受け入れねばならぬ部分も存してはゐるが、抑もその態度が半片のパンを得るよりも此れを捨つ可き事を獎めるが如きものであり、單に反對せんが爲めの反對論に過ぎない。我々は現時の經濟學の研究が必ずしも萬全なるものと考へないのであり、均衡理論的研究の前提となる可き社會的構成自體が検討さる可き重要問題たる事をも認めるのであるが、さりとて現時の經濟學研究を否定する事は斷じて許され得ないのである。

33) *ibid.* pp. 302-320.
Fraser; *ibid.* pp. 206-7.

1) M. Grossmann, Das internationale Devisenrecht des Rückversicherers.